

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

白夜行

2011年・日本映画

配給/ギャガ

149分

2010 (平成22) 年 11 月 24 日鑑賞

GAGA試写室

Data

監督・脚本：深川栄洋

原作：東野圭吾『白夜行』（集英社刊）

出演：堀北真希／高良健吾／船越英一郎／戸田恵子／田中哲司
／姜暢雄／緑友利恵／中村久美／栗田麗／山下容莉枝
／今井悠貴／福本史織

👁️👁️ みどころ

19年前に起きた密室殺人事件の謎とは？あの時はまだ幼かった容疑者の美しい一人娘と、ひきこもりだった被害者の息子は今、どこで、何を？定年後なお事件を追う刑事の執念は、一体なぜ？累計200万部。東野圭吾文学の最高峰がTV、舞台に続いて遂に映画化！2時間29分の壮大な物語の中で展開される多くの人生観から、あなたは何を学ぶ？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■東野圭吾の最高峰が遂に映画化！■□■

東野圭吾と言えば今や日本でNO. 1のミステリー作家だが、『白夜行』は人気投票を行うたびに人気NO. 1に輝き続けている作品らしい。日本ではTVドラマ化されたうえ舞台でも上演され、韓国では映画化されていたが、今般日本でも堀北真希と高良健吾という若手2人と、船越英一郎との共演により、遂に映画化！

私は東野圭吾の小説を読んだことはないが、映画は、『手紙』（06年）（『シネマルーム12』207頁参照）、『容疑者Xの献身』（08年）（『シネマルーム21』143頁参照）、『さまよう刃』（09年）（『シネマルーム23』207頁参照）を観ており、それなりに評価している。『真木栗ノ穴』（07年）（『シネマルーム21』386頁参照）、『60歳のラブレター』（09年）（『シネマルーム23』183頁参照）、『半分の月がのぼる空』（09年）の深川栄洋が監督をした本作は2時間29分の長尺となったが、それは登場人物が多く、発生する事件が多いうえ、多様な人生観が交錯するためだ。

映画冒頭描かれるのは、昭和55年（1980年）に、とある廃墟ビルの密室内で起きた質屋の店主殺人事件。第一線でその捜査にあたったのは所轄の笹垣刑事（船越英一郎）

ただ、そこで笹垣刑事の印象に残ったのが、10歳になる被害者の息子・桐原亮司（今井悠貴）と、容疑者とされた西本文代の娘で、亮司と同じ10歳の西本雪穂（福本史織）。笹垣刑事が店主の妻である桐原弥生子（戸田恵子）と質屋の従業員で弥生子の愛人でもある松浦勇（田中哲司）から事情聴取をしている時、亮司は「犯行時、僕はお母さんとテレビを観ていました」と母親のアリバイをしっかりと証言したが、さてその信憑性は？他方、質屋の店主が事件の直前に訪れていたという西本文代から事情を聴こうとした時、嘘で取り繕おうとする母を制したのが、一人娘の西本雪穂。このませた（？）ガキたちは一体ナニ？また、10歳にしてすべてを達観したような雰囲気を持つこのガキたちは一体ナニ？捜査経験豊かな笹垣刑事のそんな直感がストーリー進行のポイントとなる。ところが、この質屋店主殺人事件は、文代の若い恋人が事故死したうえ、文代がガス中毒死してしまったため、被疑者死亡のまま「解決」した。しかし、このいい加減な捜査ぶりは一体ナニ？映画とはいえ、こんな捜査をしているから、近時の大阪地検特捜部の証拠改ざん事件が起きたのでは？

■昭和から平成への時代の流れもきっちり！■

昭和55年の質屋店主殺人事件がひとまずおさまると、スクリーン上は次の時代の昭和63年に。雪穂と亮司は高校生になっていた。10歳の時は貧乏な家庭の娘だった雪穂が今は唐沢礼子（中村久美）の養女となり、清華女子学園というお嬢様高校に通っているのはなぜ？また、この時雪穂は皆からいじめられている女の子・川島江利子（緑友利恵）に近づき親友になったが、それはなぜ？

続いて、映画は平成元年、大学に進学し江利子と共にダンス部に入った雪穂の様子を描いていく。美しい雪穂がダンス部部长の篠塚一成（姜暢雄）から興味を持たれたのは当然だが、なぜか篠塚は雪穂ではなく江利子に急接近。そんな中、雪穂が見せる怪しげな行動とは？ここらあたりまでは堀北真希扮する雪穂の謎めいた美少女ぶりが際立っているが、その裏で犯罪の影もチラホラ。女を顔だけで判断するのは大まちがひ。こんなかわいい顔をして、ひょっとして雪穂は稀代の悪女かも？

そんな推理が少しずつ働き始める中、時代は一気に平成10年へと飛んでいく。ここでは雪穂は既に篠塚との婚約が整い大金持ちの家の嫁になろうとしていたが、これって後に篠塚の妹が兄に進言したように、ひょっとして雪穂の戦略？

■アイドルから女優へ！■

堀北真希が『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）（『シネマルーム9』258頁参照）で第29回日本アカデミー賞新人俳優賞を受賞したのは納得だが、その後の彼女の活躍は？舞台『ジャンヌ・ダルク』はかなり評判になっているらしいが、残念ながら私はそれを観ていない。そして、『大典』（10年）でのお信役は悪くはないが、やっぱり柴咲コウ

の後塵を拝している感じは否定できず、このままでは日本のNO. 1女優への途はまだまだ険しそう。そう思っていると、本作ではその堀北真希が何とも複雑な悪女役に初挑戦。米倉涼子は松本清張原作のテレビドラマ『黒革の手帖』でフィーバーし、一躍悪女役が板についてきたが、これまで清純派で売ってきた堀北真希は本作でどんな悪女ぶりを？ここで思い返されるのが、桃井かおり。『幸福の黄色いハンカチ』（77年）で武田鉄矢と面白い共演をした桃井かおりは、その後『疑惑』（82年）（『シネマルーム10』33頁参照）などで何とも個性的な役を演じ、一躍日本を代表する女優に成長した。それに比べて、堀北真希は？アイドルから女優へ！その課題を背負う女優は相武紗季、戸田恵梨香、新垣結衣などたくさんいるが、さてそのトップを駆け抜けるのは誰？

■□■ダルビッシュ風イケメンの心の中の苦悩とは？■□■

昭和63年。欲求不満のオバさんたちを相手に性を売る商売をやっている男の姿が登場するが、これが何ともカッコいい。今や日本ハムのエースの域を越え、日本球界のエースに成長したダルビッシュは紗菜子夫人との離婚問題に悩んでいるようだが、そのダルビッシュと瓜二つともいうべきハンサムでカッコいい男が高良健吾演ずる桐原亮司。亮司は、今一時の心の安らぎを20歳も年上の薬剤師である栗原典子（栗田麗）との間に得ていたが、彼の心の奥の秘密はその一部だけは共有できても、その全部はとてども・・・？

東野圭吾のNO. 1小説のネタをすべてバラすことができないのは当然だが、本作最大のポイントは、雪穂と亮司がそれぞれ10歳の時に起きた昭和55年の質屋店主殺人事件におけるお互いの位置。映画冒頭では全く2人に接点はなく、単に笹垣刑事の印象に強く残っただけの2人だったが、互いに成長する過程でいろいろと身につけたものとは？ダルビッシュ風のイケメンが売りの亮司だが、その心の中は複雑。一時は栗原との間でささやかな同居生活が維持できるかに思えたが、ある日推理小説を書いてみようかなという冗談とも真面目ともつかない会話の中、なぜか青酸カリの話題に。すると、その後たちまちあちこちでそんな事件が。そして、それが愛するダルビッシュならぬ亮司の犯行だと覚った20歳も年上の女・栗原が決断した、ある行動とは？

本作のメインテーマは雪穂と亮司の純愛ならぬ何とも表現の難しい「つながり」だが、20歳も年上のさまよえる魂の中で生きていた栗原がたとえ一時であっても亮司とめぐりあえたのは、すごい幸せ？

■□■「2時間ドラマの帝王」の起用は？■□■

私はテレビドラマは全然観ないが、笹垣刑事を演ずる船越英一郎が「2時間ドラマの帝王」と呼ばれていることはよく知っている。その出演数は300本を超えているというから、立派なものだ。しかし、所詮テレビの2時間ドラマはそれだけのもの。コーヒーを飲みながら、お菓子を食べながら適当にテレビから流れてくる音や映像を観ている茶の間の

人たちに、「ああ、なるほど」と納得させるのがテレビの2時間ドラマの役割だから、ややこしいのは御法度。どこかできちんと犯人捜しのネタばらしをして、視聴者に納得させることが不可欠だ。

そんな「2時間ドラマの帝王」船越英一郎を起用したためか、2時間29分の本作はちょうど2時間を過ぎたところから、笹垣刑事による質屋店主殺人事件の全貌解明のシーンが登場する。しかし、深川監督、これってナニ？2時間ドラマならともかく、お客が金を払って観る映画では、こんなクソ丁寧な説明は不要なのでは……？

■□■やっぱり、女は怖い！それが最終結論？■□■

本作を観ていると10歳の西本雪穂はもちろん、高校生になってからの堀北真希演じる唐沢雪穂は表面上は美しく上品だが、その内心が全く見えないバケモノであることがよくわかる。しかして本作のテーマは、なぜ雪穂はそんな女に成長したの？ということだが、それが最初からすぐにわかれば東野圭吾文学も成立しないし、本作も成立しない。つまり、それがわかるのは、あっと驚くある大きな秘密が明らかになってからなのだ。

男と女は同じ人間だが、根本的に違うものらしい。したがって、男と女を同じ人間と評価すること自体がナンセンスで、男人種と女人種があると理解すべきという学説(?)もあるらしい。本作を観ていると、そんなことを痛感させられる。一見幸せに栗原との同居生活を送っているかに見える亮司だが、それが仮のものであることは誰の目にも明らか。しかして、それは一体なぜ？彼は一体どんな運命を背負っているの？それが、男の視点で亮司を見る場合のテーマだ。他方、女の視点で雪穂の生き方を見ればどう？あんなに大変な状況下で少女時代を過ごし、しかも殺人容疑者の娘という目で世間から見られた10歳の女の子が、その後なぜ清華女子学園というお嬢様高校に入り、篠塚家に嫁入りするという快挙を成し遂げたの？それは単なる偶然？それとも、しっかりした意思としっかりとした情勢分析にもとづくしっかりした戦略によるもの？本作を観ていると、それが後者であることが次第に明らかになってくるはずだ。自分の目の前で亮司が死亡しても、なお「私はそんな男は知りません」と言える根性。やっぱり女は怖い。私にとっては、それが本作の最終結論？

2010(平成22)年11月15日記